

関智英著

『対日協力者の政治構想』

——日中戦争とその前後——

松浦正孝

読み物としての面白さ

壮大なドラマである。まずは、十二章から成るオムニバスの人間ドラマを、理屈抜きに楽しんで頂きたい。歴史は良い読み物でなければならぬ。本書は文章も気負わず、達意で読みやすい。とにかく実際に読んで頂きたいので内容紹介は必要最小限に止めるつもりだが、多少のネタバレはお許し頂きたい。

すでに本書は、巷間高い評価を受けているようである。日本帝国が「中国」に作った傀儡政権をめぐる研究は、中国大陆、台湾、日本、欧米、それぞれの政治的磁場によって複雑なバイアスに影響を受けてきた。「売国奴」、「漢奸」、「偽政権」、「コラボレーター」、「グレイゾーン」、「真の愛国者」、「親日派」等々、様々である。苦心の末、著者は「占領地政権」「(対日)協力者」という用語を選んだ(本書緒論の註3)。一方で、一九九〇年代以降、漢語・日語・英語を始めとする夥多の実証的業績が、汪精衛政権、華北や華中の政権などを中心に蓄積されて来た。日本史、中国史、それぞれに異なる文脈も蓄積もある。傀儡政権をめぐる歴史を書

くと言っても、史料をめぐる制約もさることながら、どんな角度から切り込むのか。自分が当事者であつたらと考えるだけでも、立ちすくむ思いがする。

極限の状況に置いたまれた生身の人間が、どのように決断し、何を選択したのか。対象とするライフ・ヒストリーに寄り添い、史料の森を深く探し求め、発掘して来た事実やエピソードを取捨選択してストーリーを紡ぎあげ、歴史の襞を淡々と明らかにする。それこそ、歴史家にしかなし得ないことであろう。時を経るといふ厳しい審判に耐えることで、歴史は、浅薄な「理論」や政治的評価に対する静かな、しかし厳然たる異議申し立てとなる。歴史の舞台で勝者となり、敗者となることは、必ずしも必然ではない。安易に「イフ」の問いを立てることは許されないが、当時の不透明・不確実な「今」を生きていた人々が、懸命にもがき、抗いつつ流され、翻弄され、あるいは決然と選り取った時代の風浪や潮路を理解するためにも、「敗者」となった側の物語を追体験することは、大事なことである。

本書はまた、作品全体を、足かけ二〇年にわたる知の大冒険から帰還した勇者の「物語」としても楽しめる。著者は、理論と事実との狭間で、これは、と思った「協力者」の軌跡を解き明かすべく澹然と材料を集め続けた。日語資料だけ見ても、手間暇を惜しまず、外交史料館、憲政資料室、防衛研究所を始めとする諸史料・新聞・雑誌を渉猟し尽していることが見て取れる。また、著者が研究対象に限定されないう極めて広い関心と視野を持ち、世間の善悪評価を併せのむ温かい眼差しを人々に注いでいることにも驚かされる。暗闇に小さな足取りを追っていく中で、予期もしな

かった別の物語につながる記事と出会い、それに導かれて新たな地平を前にした筆者の昂揚を感じさせる発見も、そここに隠されている。

そして本書には、読み進めるにつれ、どこに連れて行かれるのかわからないワクワク感がある。各章のストーリーを読み進めるにつれ、単なる事実や歴史の羅列ではなく、著者を導いた大きな流れがあるという確信が、次第に強まる。読み終わった後、「あとがき」さえも演出の一つではないかと、様々な仕掛けの妙に思いを馳せるのも楽しい。誰もがまず気づくのが、各章の冒頭に配置されるエピソードである。日本人との関わり。戦争と戦後。ワイドショーで取り上げられるような世俗的な話題。それらは、本書の扱う歴史が読者の一人一人と関りがあることを強調すると共に、読者に登場人物たちのイメージを植え付ける。

評者が最も驚いたのは、第五章「中華民国維新政府指導層の時局観」の冒頭で紹介された、戦後の王子恵こと王文成による詐欺事件（本書二〇二頁）であった。かつて一九三〇年代の日本の新聞を読み漁っていた頃、評者も維新政府の要人として王子恵の名前は知っていたが、その王が二〇年後に日比谷で詐欺事件の容疑者として検挙されたことは全く知らなかった。著者は傀儡性と基盤の脆弱性のみでない維新政府の経緯や多様性を紹介しているはずだが、このエピソードは評者にすっかり維新政府のいかかわしさを印象づけた。著者は、「このような素性の不確かな人物」を維新政府幹部に据えたことと、第四章で紹介した上海市大道政府に関わった西村展蔵や蘇錫文を利用しようとしたことをあわせ、日本軍特務の筋の悪さを指弾する（本書二二八頁）。史料を紹介

し分析するだけでは、得体の知れない胡散臭さまでは伝わらない。エピソードの選び方、紹介の仕方にも、細やかな工夫がこらされている。

第一章の殷汝耕についても、妻が日本人であることは知っているが、その一族との関係や腐敗についての記載を興味深く読んだ。第六章の興亜建国運動と、右翼で日本の政財界の黒幕である児玉誉士夫との関係も、戦時と戦後とのつながり、政治の闇の深さを感じ知らせる。そもそも本章の主人公の袁殊は、二重スパイから五重スパイまで疑われた人物であり、占領地工作が、国民党特務や共産党に依拠せざるを得ないという中国政治の地下茎の上に成り立っていたという複雑さ（本書二六五―二六六頁）を、本章は説得的に浮かび上がらせている。

一方、呉佩孚擁立工作と日支民族会議を扱った第三章では、冒頭で引かれた司馬遼太郎と陳舜臣とが同調しあった呉佩孚虚像論とは異なる方向の議論がなされる。呉擁立工作がなぜ当時あれほどの反響を持つものであったかについて、その足元を支えた日支民族会議の中心となった江藤大吉の周辺が子細に検討されている。実際、日本側・中国側での当時の呉擁立による和平工作に対する期待は大きなものであった。その根拠が実証されたと言えよう。

サスペンスドラマも真つ青な、第九章冒頭の安藤彦太郎による回想にも仰天した。中華人民共和国で名だたる経済史学者として知られた呉杰が安藤に向かい、実は自分は、京大・東大大学院に学び、京都学派の高山岩男と論争した維新政府派遣留学生で、汪政権の東京大使館秘書官として招聘された旧知の呉珮であるというのだから明かしたものである。呉は、汪政権からは繆斌工作に関わ

つたとして弾圧され、国民政府からは文化漢奸として追われた。本章のメインテーマである京都学派との論争自体よりも、場や身分を変転させつつ思想・学問を続け、抗日・対日協力を異にする政権流転の中で強かに自民族への矜持を持ち続けた知識人のあり方に、評者はより強い印象を受け、「対日協力」という問題に関わる本質的なものを強く感じた。

政治思想・政治構想の分析

本書の最大の貢献は、これまで扱われてこなかった「占領地政権」や「対日協力者」の情報を詳らかにしたことよりも、もつと別のところにあると評者は考える。結論から先に言えばそれは、日中戦争前後における、日本と「中国」とを取り巻く歴史環境（特に周辺部・圏界）、そして日本と「中国」ないしアジアとの内的紐帯を明らかにしたことである。

本書の標題は「対日協力者の政治構想」であり、占領地政権や対日協力者の政治思想や構想を明らかにすることがその課題とされている（本書三九―四二頁）。実際に第七章では、孫中山の憲政理論継承をめぐり蒋介石政権と対抗した汪精衛政権の憲政実施構想が論じられている。ただ、本書は、「対日協力者」の中核であった汪精衛政権以外のサブリーダーや民間活動家、理論家らに多くの光を当てているため、代替選択肢としてのまとまった政治構想を明らかにするというよりは、それぞれのアクターがその時々局面でどのように現状を切り開こうとしたかという作為の経時的連続性を解きはくす方に、比重があるように思われる。第七章で紹介された折角の憲政論議も、最優先の戦闘継続の中、

共産党の脅威を怖れたこともあって、結局は尻すばみに終わったというのが結論である。

戦争や戦後の時の流れに圧倒されていく対日協力者たちの「政治構想」は、読者が歴史の結果を知っていることを差し引いても、力弱く、各地に分散して多種多様であった。彼らが掲げる政治構想には、限られた環境下での偽装・迎合・宣伝などもあると考えられ、その解釈は難しい。彼らの極限された状況を念頭に置いた上で、一二本の墓標から立ち現れる多様な言語象徴の連続性と背景、表面からは読み取り難い含意などを解析することが必要である。本書で明らかにされる「防共」、「反共」、「アジア主義」、「連省自治」、「憲政」といった言葉は、占領地側の大変重要な象徴である。特に第一章における冀東政府の殷汝耕は、留保付きではあるが、結果的に「防共」で共産党と、「連省自治」で国民党（蔣政権）との差異を強調する言葉を使い分けたという指摘（本書九五頁）は、なるほどと思った。また著者は、第二章の張鳴の「五族解放」、「亜細亜国際連盟」、第三章の日支民族会議下の自治団体の「自治」、「防共」、「民主」、「連省自治」、第六章の興亜建国運動の「興亜」、「反共」、第七章の汪精衛政権の「憲政」、第八章の伍澄宇の「革命」及び憲政議論についても、その実体的な意味に立ち入って検討している。この中では、孫中山の米国における革命活動の同志として出発し、その後も「革命」や憲政論を純理的に貫きながら、維新政府・汪精衛政権にも参加し、戦後は南京でも台北でも下獄した「革命老人」伍澄宇が、やや異質である。

翻って、第一章で扱われる政論家胡蘭成の「一見散漫にも見える」（本書四二―四三頁）言論活動は、本書でもあまり理

論的分析の対象とはなっていない。胡は、汪精衛派の機関誌『中華日報』の主筆となるが対米英参戦をめぐって汪と対立して投獄され、その後敗色が濃くなると日本側外交官の庇護を受けた。そして五〇年に香港経由で日本に亡命、『毎日新聞』『改造』などに論説を発表し、保田與十郎や安岡正篤ら日本の保守派文化人や神道系修養団体と交流した。著者は、胡が戦前・戦後にわたり「政治や社会の問題を論議し続けた」と指摘するが（本書四一一頁）、揺らぎの大きな胡の一貫性を支えた芯が何だったのか、より深く迫って欲しかった。しかし戦後、日本の保守空間で反共や大陸反攻を掲げる胡が受け入れられた事実は重要である。

上記のように本書は、対日協力者の政治思想が、いかに多様で複雑かということを構造的にあるいは状況に即して説明することに成功した。これは、本書の貢献の一つと言って良い。

「日本帝国」周縁の連関性

しかしながら評者はそれよりむしろ、日本帝国が彼らに用意した行動空間・思索空間のありようを析出したことこそ、本書の最も重要な貢献であると感じた。このテーマをトレースするのは至難の業であるが、本書はそのデッサンに十分成功していると思う。例えば本書は、近年の経済史や政治経済史、国際政治史などで明らかにになった、福建・台湾・満洲・「蒙疆」・東南アジア・インドなどの「日本帝国」の周縁の連関性をつなぐ稜線を示した。その稜線は、戦後日本にも、脈々とつながっている。本書は、ほとんどの日本人が知らない、しかし坊間の捏造された歴史でもない、もう一つの重要な日中関係史のありかたを指し示したと言えよう。

否、日中関係史と呼ぶにはあまりに壮大な、新たな日本（「日本」という枠組みも適当ではないかも知れない）とアジアとの関係史の幕開けである。上記の稜線について著者は、結語の「今後の課題」の第一（本書四八七―四八八頁）・第四（本書四九〇・四九四頁）において、張鳴・王子恵・蘇錫文や陳羣・任援道・陳中孚・夏文運らに即し示唆した。著者の指摘する通り、蒋介石ではなく胡漢民を軸として国民党の歴史を整理すれば全く異なる景色が現れるのであり（本書四九四頁）、それは日本側についても、満洲↓華北↓華中というお決まりの侵略経路ではなく、台湾↓西南・南方という経路に着目すれば、同様である。

こうした帝国外縁の稜線は、協力者たちが活動する舞台としての回廊の役割も果たす。本書では、第二章で扱われている、「五族解放」「大漢国建国」を掲げ西南派・台湾・南洋（東南アジア）・インド・モンゴル・東京にわたって活動した台湾生まれの張鳴の活動が、その例である。居正の娘で萱野長知の養女を妻とし、戦後は台湾の淡江大学を創立した人物。とにかくスケールが大きく、躍動感がある。それは、日本帝国の外縁を周回しての活動であり、亜細亜国際連盟構想を著者は神川彦松の影響だとしているが（本書一二三―一二六頁）、俯瞰的に見れば当時大きな影響力を持っていた大亜細亜協会の主張を模したものであろう。

また、第二章で言及される、戦前、満鉄理事や興中公司社長を務めた十河信二は、戦後は新幹線生みの親として知られる国鉄総裁であったが、対日協力者の生活を支援する善隣友誼会に寄付した数少ない日本人でもあった（本書四七三頁）。十河は満鉄理事時代、広東駐在武官の和知鷹二と提携して胡漢民らの西南派に

対し、満洲大豆を輸出して専売制とし借款を供与する構想や、「日支合弁銀行」設立構想などを通じて切り崩しを行う計画の一端を担っていた（拙著『大東亜戦争』はなぜ起きたのか』名古屋大学出版会、二〇一〇年、二八六―二九三頁）。十河に表れている活動履歴と人脈と思いの連続性は、満洲と中国西南部とをつなぎ、さらに戦後日本へとつながっている。

一方、本書四六七頁によれば、満洲国産業部次長として満洲国を牛耳った岸信介だけでなく、満洲重工業開発総裁を務め東洋製缶社長として台湾のパイナップル缶詰にも深く関与した高碕達之助ですら、対日協力者の入国や保護について、「お気の毒だ」と口先では言うものの「まったく素っ気ない」態度であったという高碕が中華人民共和国との「国交回復」の立役者となるのは後のことであるが、対日協力者に冷たかったのはどうしてだろうか。

日本帝国の周縁をつなぐ稜線は、地理的な回廊となっているだけではなく、社会構造において協力者を匿う一種の「アジール」ともつながっている。即ち、香港・マカオ・台湾といった植民地や厦門・上海・天津などの租界、特務機関、個人宅などである。第一〇章の「中国人の代弁者」吉田東祐や満鉄調査部の転向者も含めて、本書の主人公である対日協力者のカウンターパートとなつた日本人工作者は、内地での共産主義弾圧から逃れてこうした舞台で、情報収集・分析、和平工作、宣伝工作などに従事した。

そして対日協力の問題は、アジア主義同様、しばしば「情」や「意気」の問題とも近接する。本書で特に取り上げられている文学者尾崎士郎の王子恵・胡蘭成・呉佩孚への文学的な「感動」を伴つた交際は（本書四八八―四八九頁）、その事例として読むこ

とができる。尾崎士郎は、戦前日本共産党の代表として上海のコミンテルン事務局で活動していたという水野成夫とも、その転向後に親しくなつた（拙稿「財界人たちの政治とアジア主義——村田省蔵・藤山愛一郎・水野成夫」『立教法学』九五号、二〇一七年、三三―三六頁）。両者を意気投合させたのは、共産主義・社会主義運動への関与とその後の転向、文学、浪漫主義と任侠的精神という共通点であつたが、それは尾崎の対日協力者に対する「感激」と類似しているように思われる。

本書でも、共産主義から転向した日本人で対日協力者たちとの協働に携わつた事例が、取り上げられている。共産党活動で検挙された後、憲兵と参謀本部ロシア課の手で上海に送られ、対重慶和平工作にあたつた吉田東祐である。上海公使館付武官の喜多誠一や憲兵の林秀澄との関係、スウェーデン経由の終戦工作で有名な小野寺信の上海特務機関での重慶工作、『申報』での「アンクロサクソン批判」を通じての汪精衛政権批判、戦後の愛知大学での活動などは、転向と占領地における対日協力・特務工作との隠微な関係をよく示している。

なお、本書は胡漢民など国民党西南派と関りのある勢力を多く扱い、満洲国に隣接する冀東政府を扱った第一章でも、結局は満洲国モデルではなく中華民国の枠組みが選ばれたことが指摘されている（本書一〇一頁）。政治構想としての共産党モデルとの関係についても、あまり多くが扱われていない。そもそも「対日協力者」の中に、満洲や朝鮮・台湾などの植民地は入っていない。

そのこと自体は問題ではないが、どうしてそうなつたのか、例えば本書の分析枠組み自体に起因するものなのか、あるいは当時の

「中国」の状況がそうした構造を持っていたのか。緒論からさらに踏み込んだ説明が欲しかった。

新たな日中関係史、または日本・アジア関係史へ

著者が「今後の課題」の第五として挙げている「日本人が結ぶ縁」（本書四九四―四九五頁）が何を意味しているのか、ややわかりにくい。対日協力の工作者となった日本人をハブとすると、新たな「日中関係史」を構成する戦前・戦中・戦後のネットワークが見えてくるということであろうか。そうであるとしたら、確かにそれは手つかずのまま眠る豊かな鉱脈である。

その例として本書があげているのは、不思議な熊本の「名士」紫垣隆や上海市大道政府顧問西村展蔵と汪政権中央監察委員陳中孚ら（本書一九四―一九六、四五七頁）をハブとするネットワークであり、雑誌『ジャーナル』に集まる元汪政権宣伝部政務次長胡蘭成や岩淵辰雄・鍋山貞親・有沢広巳・中山優・石森久弥・大森曹玄・安岡正篤らであり（本書四二七―四二九頁）、そして繆斌工作に関わった予備役陸軍大佐の山縣初男である。特に山縣は、著者も指摘するように（本書四九五頁）、世間ではほとんど知られていないが、日本帝国の対中工作ネットワークを解明する手掛かりとなる。彼は、陸軍教導団出身の屈指の「支那通」で、雲南省軍事顧問となり、大アジア主義者小磯園昭と士官学校同期で小磯内閣期に繆斌工作に関与した謎多き人物である。本書では、第三章で日支民族会議を提唱した江藤大吉もこの繆斌工作に関わり、第八章で小磯首相の命を受けた山縣が伍澄宇と会見し、第二章で山縣は戦後、岡村寧次と共に対日協力者救済の嘆願書に名

を連ねる。対日協力者を分析した本書の各所で山縣の姿が見え隠れするのは、彼らのネットワークがつながっているからである。

山縣は、戦後、文相や防衛庁長官、総理府総務長官・沖繩開発庁長官などを歴任した自民党の政治家三原朝雄の岳父としても知られている。学生時代から愛国主義に関心を寄せ、自ら満洲国に渡り大同学院に入学して石原莞爾とも交流があり、右翼・保守へのシンパシーを隠さなかった三原を調べることでまた、戦後保守の新たな地下水脈をたどることもできよう。

また、戦後の在日第三勢力の関係図として掲げられた図結・1、2、3（本書四九〇―四九三頁）には、上記の作業をするための手がかりがいくつもある。例えば、図結・3「在日第三勢力と各方面関係の調査」（一九五二年）には、元広東駐在武官和知鷹二の名前がある。台湾軍司令官であった松井石根の腹心で大亜細亜協会の中心メンバーでもあった和知は、広東駐在となる前は関東軍参謀として活動しており、彼の秘書は満洲出身者であった（前掲拙著、九三二頁）。広東では松井らと大いに連絡を取り合っており、西南派に対する工作や大亜細亜主義の普及に活躍した。戦犯として重労働の刑に服した後仮出所したが、五三年一〇月、本書によれば岡村寧次らと共に、華北憲兵総司令だった黃南鵬らの相互扶助機関「在日中国人更生会」を支援する「大陸当時親交のあった政界及び実業界の有力者」の一人として名前があげられている（本書四六二頁）。

前記の図結・3には、和知は中国民主大同盟と協力関係にありアメリカ極東空軍特別調査部とも関係を持つと書かれているが、その肩書は九一青果（秋葉原駅前）顧問である。日本有数の謀略

将校の戦後の肩書としては、意外の感がある。これを見た瞬間、評者は秋葉原駅前の青果商とは、戦後高級品であった台湾バナナを扱う闇市の露天商かと思った。しかし調べると、年商二〇〇〇億円近い現在の日本における青果物卸売の最大手、東京青果株式会社の前身であると推測される。同社ホームページによれば、同社は一九四七年、神田青果市場（秋葉原駅前周辺）に設立された東印東京青果株式会社と東京丸一青果株式会社が六七年に合併、八九年に神田市場が大田市場へと移転したに伴い、本社を現在の大田市場内へと移転した（<https://www.tokyo-seikacojp/01about/01-02about.html> 二〇二〇年一月一日閲覧）。

和知は戦後の混乱期、台湾における伝手を見込まれて果物の調達ルートを確保したのだろうか。経営者が和知の旧知の台湾総督府関係者だったのか。本書で和知は「政界及び実業界の有力者」と紹介されているが、「戦犯」として公職追放された和知らは、何を考え、どのように暮らしていたのだろう。想像するしかない。

なお戦前・戦中、和知が活動の中心としたのは大亜細亜協会であった（前掲拙著、五八二―五八六、六四三―六四六頁）。本書には、大亜細亜協会も、その中心の一人で戦後も活躍した中谷武世の名前も、出てこない。評者としては気になるところである。

闇市と復興。冷戦と講和。「戦犯」の名誉回復と「保守」再建。自衛隊・海上保安庁を含む戦後官僚制の再編。戦争への悔悟と正当化。永田町と霞ヶ関の外交だけが、日本外交を形づくるわけではない。これまで収縮した日本列島の中だけで語られて来た「五十五年体制」の歴史は、「中国」を始めとするアジアとつながっており、戦前からのアジアとの関係とも分かちがたく結びついて

いた。闇市の跡を残す各地の商店街に、植民地出身者の経営する青果店は多く存在していたはずである。本書では、中華料理店・ロシア料理店の経営を始めとする様々な仕事を始めた、協力者たちのその後の人生が示唆されている（本書四七四頁）。著者には、清末の実業家・政治家盛宣懷の孫で日本に留学した後上海の工部局に務め「漢奸」に問われ、戦後は日本に戻って中華の名店留園を経営した盛毓度についての「対日協力者の戦後——日本亡命者盛毓度と留園」（高綱博文・木田盛文・堀井弘一郎編「アジア遊学236 上海の戦後——人びとの模索・越境・記憶」勉誠出版、二〇一九年）もある。一読を勧めたい。口にすることもタブーとされてきた「第三国人」と呼ばれた人々と、日陰の身となった「戦犯」や旧軍人たちは、「戦後」を生き延びる中で人生をどう交錯させたのか。こうした領域を、日本政治史・経済史も、中国政治史も、日中関係史も、国際政治史も、目を逸らし手つかずのままにして来た。

かくして本書は、未開の沃野のありかを示した。著者を導いて「細部の森」から大きな成果と共に無事帰還させたヘンゼルの「白い小石」は、「占領地の中国人の活動には、官民問わず日本人が密接に関わっていた」という「信義の問題」を問い続けた著者の思い（本書五八三頁）だったのではないだろうか。

（A5判 目次・凡例・地図一〇頁 五八六頁 索引・図表一覽一八頁

二〇一九年一〇月 名古屋大学出版会 税別七二〇〇円）

付記 本書評は、日本学術振興会科研費補助金（課題番号 18H03625）の成果の一部である。（立教大学法学部教授）